

「昭和の町」に高齢者向け交流施設をつくり、さらなる賑わいを創出

豊後高田商工会議所

機関名	豊後高田商工会議所		
所在地	大分県豊後高田市大字高田986-2		
電話番号	0978-22-2412		
地域概要	(1)管内人口 1万8千人	(2)管内商店街数 8商店街	
事業の対象となる 商店街の概要	(1)商店街数 4商店街	(2)会員数 49商店	
	(3)空店舗率 35.5%	(4)大型店空き店舗数 1店	
商店街の種類	1.超広域型商店街 2.広域型商店街 3.地域型商店街 4.近隣型商店街		

【事業名と実施年度】

平成14年度 コミュニティ施設活用商店街活性化事業

高齢者等の交流拠点を整備

- ・地区老人会の運営により、碁会所、高齢者向けカルチャー講座、健康教室、3世代昔遊び教室など
- ・情報発信拠点として講座の作品展示、リサイクル情報の提供等

総事業費

3,132千円

【事業実施内容】

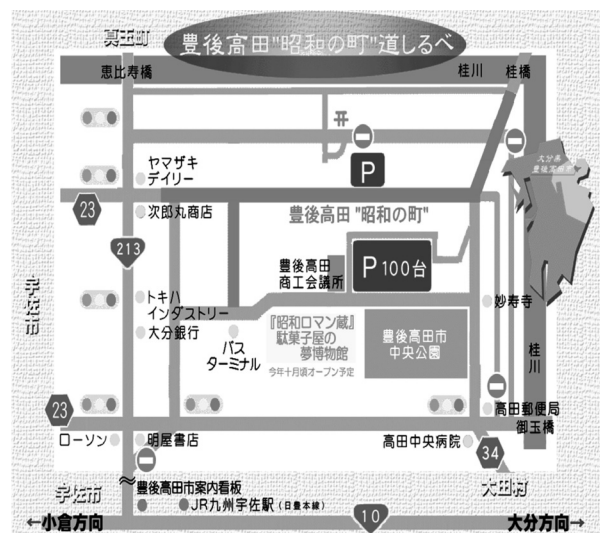
1. 背景

(1) 中心市街地の概要

大分県豊後高田市は「仏の里」として名高い国東半島西側の中心都市である。市の中央には桂川が流れ、市街地はその河口付近に広がっている。市内の商店街は桂川によって二分されており、西側に6商店街、東側に2商店街があり、それぞれが地域商業の核として栄えてきた。

本事業の実施にあたっては西側の6商店街から、国道10号線に近い中央通り、新町1・2丁目、駅通りの4商店街を対象商店街として選定した。この4商店街

には、かつてスーパーマルシヨク、大分銀行、西日本銀行が立ち並んでいたが、数年前に両銀行が国道213号線沿いに移転、平成12年にマルシヨクが撤退し、人通りの減少に拍車がか



豊後高田の中心部

かり、廃業する商店も増加している。

中央通り商店街、新町1・2丁目商店街は昭和37年に、駅通り商店街は昭和38年に結成され、いずれの商店街も昭和40年代まで活気あふれる街並みを形成し、「豊後高田市の顔」として中心商店街の役割を果たしていた。しかしながら、モータリゼーションの進展、交通体系の整備、消費者のライフスタイルの多様化などの影響を受け、人口の郊外への移転とこれに伴う大型小売店など商業施設の郊外展開が進展している。加えて周辺都市の大型商業施設・レジャー施設オープンの影響を受け、最盛期には4商店街で130店を超してい



昭和30年代の姿をそのままとどめる商店街

た会員は49店にまで減少し、空き店舗も27店舗となるなど、商業機能の空洞化も危惧されている。これに対し売出しやイベント、定期的な朝市の開催など様々な活性化策が講じられてきたが、近年、豊後高田市では中心商店街を舞台に「昭和の町」をテーマに掲げたまちづくりに取り組んでおり、そのオリジナリティ溢れる試みは、全国的に注目を集めている。

(2) 「昭和のまち」づくりへの取り組み

「昭和の町」というテーマ設定のきっかけは、平成9年3月の「豊後高田市街地ストリート・ストーリー」の完成に遡る。中心市街地活性化のための話し合いが繰り返されるなか、常に問題になっていたのが「中心市街地にこだわろうという意思は一致しているものの、こだわりの中身は何なのか」ということであった。この問いに答えを見出そうと、中心市街地の古代から近代、明治・大正・昭和に至るまでの歴史資料を調べ上げ、1枚の地図の中にその歴史を書き込んだのが、「豊後高田市街地ストリート・ストーリー」である。その結果、歴史や伝統は近世や近代だけでなく、昭和にもあること。また、古くて不便だとばかり思っていた既存商店街が、実は昭和のままの姿をとどめているという魅力があること。「昭和」というテーマが観光産業においてブームになりつつあることを発見したのである。

このテーマ設定を受けて、さらなる調査事業やシンポジウム・講演会の開催を経たのち、平成13年度に大分県地域商業魅力アップ総合支援事業（街並み景観統一整備事業分）を導入し、11店舗を昭和30年代風に改装した。これは具体的には商家の1階軒先を覆う形で取り付けられているパラペットを取り外し、その店舗が建てられた年代・建築様式に合う木やブリキの看板に改修するなど、ファザード整備を行うものである。平成13年度はさらに、中心市街地空き店舗対策事業にも取り組み、チャレンジショップや写真展示館等を設置した。



昭和の店1号店 漢方の千草堂 安東薬局

平成14年度も引き続き大分県地域商業魅力アップ総合支援事業に取り組み、7店舗の改

豊後高田商工会議所

装が予定されるなかで、地域の高齢者を中心とした「交流施設」の整備も不可欠であるとの声が聞かれるようになり、本事業を実施することとした。

「昭和の町」をテーマにした活性化への取り組みの歴史

平成9年3月	豊後高田市街地ストリート・ストーリー 制作
平成9年度	豊後高田市商店街・商業集積等活性化基本構想策定調査事業 実施
平成11年1月	昭和30年代商店街のまちなみ再現にかけた思いを語る講演会 開催
平成12年3月	昭和30年代商店街のまちなみ再生シンポジウム 開催
平成13年3月	人形“昭和の子どもたち”が語るあの時代、あの記憶講演会 開催
平成13年度	大分県地域商業魅力アップ総合支援事業（街並み景観統一整備事業） …商店街街並み修景事業の実施 中心市街地空き店舗対策事業 導入 豊後高田市一店一宝等展示施設整備事業 導入
平成13年8月	小宮裕宣—日本一の駄菓子屋のおもちゃコレクションを語る講演会 開催
平成13年9月	“昭和の町”オープニングセレモニー 開催
平成13年11月	“昭和ロマン蔵”蔵開き博覧会 開催
平成14年1月	(主な内容) 昭和のこどもたち人形写真展 昭和の街の暮らし展 昭和の村の暮らし展 昭和のヒーローなつかし映画館 昭和の行商リヤ・カー市場 昭和のお宝ほりだし骨董市
平成14年10月	“昭和の町”新装開店・“昭和ロマン蔵”開館 (主な内容) 昭和の映画看板展 ドールハウスで蘇る昭和の暮らし ～ 武下えつこ展 ～ 昭和の名作邦画展 昭和の学校体験 昭和の村の暮らし展 昭和の行商リヤ・カー市場 ちんどん屋“昭和の町”を大行進！ 紙芝居がはじまるよおお！

2. 事業内容

(1) 事業概要

豊後高田市とその周辺は、大分県の中でも高齢化率の非常に高い地域であり、高齢者が安心して楽しく暮らせる環境の整備が急務となっている。そこで、商店街内の空き店舗を活用して高齢者向けの交流施設（昭和のふれあい処“一休亭”）を整備することにより、「昭和の

町」として整備を始めた商店街にさらに賑わいを創り出すことを目指し、本事業を実施した。

駅通り商店街の空き店舗に内装工事を施して高齢者が交流できる憩いの場を設け、平日は碁会所（囲碁、将棋）、休憩談話室等に、土曜日、日曜日は各種講座、教室や来街者への休憩の場として利用した。また、年間を通じて高齢者の作品等の展示を行った。

①高齢者作品展示

書・絵画・手芸品・陶器等 平成14年10月1日～平成15年3月31日

②ふれあい囲碁教室

高齢者と子供たち 平成14年10月12日、13日

③生け花教室と展示

池ノ坊いけばな展 平成15年2月20日～3月10日

小原流いけばな展 平成15年3月1日～3月3日



一休亭の外観



一休亭の中では高齢者の作品を展示

(2) 利用状況

平成14年10月～平成15年3月までの月別の来館者数は下記の通りである。高齢者を中心とした地元住民の利用もあるが、「昭和の町」を訪れた観光客の休憩所としても機能しており、現在は月に平均して約1000人の来館者がある。

なお、観光客数は月平均1万5000人～2万人で推移している。団体旅行と個人旅行を比較すると、3対7で個人旅行が多いが、観光バスも1日に少なくても3～4台、多い日には10台が「昭和の町」を訪れている。

昭和のふれあい処“一休亭”来館者数状況

平成14年10月	590人
11月	542人
12月	365人
平成15年1月	611人
2月	619人
3月	735人
合計	3,462人

(3) 運営体制

全市を挙げて「昭和の町づくり」へ取り組んでいるという背景から、本事業の総事業費300万円のうち、3分の1の自己負担分については、豊後高田市の支援を受けた。また、平成15年度は大分県空き店舗活性化事業を活用して、家賃(3万5000円)の3分の1を大分県、3分の1を豊後高田市からの補助、自己負担分の3分の1についても豊後高田市の支援を受けている。

トイレの掃除や鍵の開け閉めなど、施設の管理については駅通り商店街のメンバーが1ヶ月交代で自主的に行っている。展示やイベントについては、住民に気軽に利用してもらえるよう、普段から利用の呼びかけを行っている。

【効 果】

高齢者を中心とする地元消費者の利便性を図ること。また、平成13年度より増加した観光客に対応するべく、課題の1つとなっていた休憩所、トイレ等を商店街に設けること、さらに昭和の町としてふさわしいソフト事業を充実させることに重点を置き、本事業を推進した。

対象商店街のイベント時(中元・歳末大売出し・街並みめぐり・おひなさまめぐり、おかみさん市等)には地元住民に楽しく利用してもらうことができ、観光客の評価も非常に高かった。これに伴い、当初の計画で最も力を入れていた地元高齢者への対応についても徐々に利用度が増す結果となり、子供とのふれあい囲碁教室、生け花教室・生け花展、書・絵画・手芸品・陶芸品等の作品展示に積極的に利用された。

全体としては「昭和の町」構想に沿って、イメージアップに役立ち、利用者も多く成功のうちに終わることができたと思われる。現在は2年目として事業を継続中であり、15年度も利用者は増加の一途である。

【課 題 ・ 反 省 点】

(1) 展示やイベントの充実

「昭和の町」のPR効果もあり成功のうちに推移しているが、今後も引き続きコミュニティ施設としてより一層の充実を図りながら地域商店街、消費者、高齢者に貢献できるように努めていかななくてはならない。高齢者の作品等の展示を積極的に行うほか、はだか祭りやホーランエンヤなど地元の伝統行事と連動したイベントにも取り組んでいきたい。

(2) 運営費を捻出するための仕組みづくり

現在は豊後高田市の全面的なバックアップ体制のもと、様々な支援メニューを組み合わせ、事業を継続できている状態である。現在の形式でのコミュニティ施設の運営はお金を生む事業ではなく、長期的に事業を継続していくためには運営費を捻出できる仕組みを作る必要がある。将来的には喫茶や物販なども行ってはどうかとの意見も出ており、今後検討を行っていききたい。

(3) 継続的な「昭和の町」づくりの推進

各種メディアに取り上げられたことで観光客は増加しているが、まだまだ「昭和の町」風の店舗が少なく、観光客が望むようなお土産品の品揃えも十分ではない。観光客の大幅な増

加を狙うための拠点施設の整備に加え、地元消費者に商店街に戻って来てもらうための魅力ある商店の充実も絶対必要条件である。「昭和の町」づくりの推進が継続的に行われることで、コミュニティ施設の存在も生きてくる。

【教 訓】

(1) ありきたりでない活性化策を求めて試行錯誤したプロセスが重要

どの市町村でも労力とお金を費やして活性化事業を実施しているが、その中で成功事例とされるものはほんのひと握りに過ぎない。当市においても多くの成功事例や失敗事例を分析したものの、ありきたりの策では金太郎飴のようになってしまうとの危惧から、活性化策の答えはなかなか見つからなかった。試行錯誤を重ねるなかで「この町も昭和30年代にはにぎわいを極めたのに」という素朴な思いから、「昭和」というヒントを得ることができたが、そのプロセスには相当の時間と労力が必要であった。しかし、このようなプロセスを重要視したことで、関係者の合意形成を図ることができ、その後の事業をスピーディに、円滑に推進することが可能となった。

(2) 行政、商工会議所、商業者が一体となること

行政、商工会議所、商業者がそれぞれ別々のことを考えていたのでは、限られた予算の中で、有効な活性化策を推進することは難しい。豊後高田市では現在も市役所、商工会議所、商業者の有志メンバーが運営協議会を組織している。その他にも頻繁に会議が行われており、イベントの内容から、テナントとしてどのような店に入ってもらうかのルールづくりまで、幅広い内容が話し合われている。なお、当市の場合は市長に大分県の商工労働観光部長としての経験があったことから、本事業に対する理解とノウハウがあり、このような一体的な事業の推進が可能になった経緯がある。

(3) 複合的な補助メニューの組み合わせ

コミュニティ施設だけをつくったのでは、集客面での目に見える効果を出すのは難しいのではないか。土台となる事業（当市の場合は、「昭和の町」づくり）と組み合わせ、複合的に諸々の事業を絡めながら実施することが重要である。土台のないところ、人の集まる要素のないところにコミュニティ施設だけをつくるのは、車の通らないところに道路を通すようなものである。

【関 連 U R L】

豊後高田商工会議所 <http://www.coara.or.jp/~buntaka/>

豊後高田市昭和の町 <http://www.coara.or.jp/~buntaka/shouwanomachi/shouwanomachi.htm>